

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 常山 菜穂子

### 論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 巽 孝之  
文学研究科委員、Ph.D.

副査 慶應義塾大学文学部教授 松田隆美  
D.Phil.

副査 ウェスト・オヴ・イングランド(ブリストル)大学人文学部教授  
ピーター・ローリングス(Peter Rawlings) Ph.D.

論文題目 “The Globe upon a Hill: Reception and Transfiguration of  
Shakespeare in the Early American Theater”

常山菜穂子君による博士号請求論文“The Globe upon a Hill: Reception and Transfiguration of Shakespeare in the Early American Theater”は、初期アメリカ演劇におけるシェイクスピア上演史を辿るとともに、アメリカ演劇がシェイクスピア劇への言及を繰り返しながらいかに自己形成していったかを中心的な主題に据え、具体的に『オセロ』『ロミオとジュリエット』『テンペスト』といった諸作品のアメリカ的受容と変容の軌跡を精緻に分析してみせた、きわめて意欲的にして独創的な試みである。各章は以下のように構成されている。

Introduction

Chapter One Reception of Shakespeare in the New World

Chapter Two The Globe upon a Hill: *Theatrum Mundi* in Early  
American Puritan Sermons

Chapter Three Signifyin(g) Othello: Frederick Douglass' *Narrative* and  
the Black Minstrel Show

Chapter Four Juliet as a Public Woman: Domestic Ideology in the  
Writings of Anna Cora Mowatt

Chapter Five Prospero's Playbook: Cultural Colonialism from the Tom  
Show to *The King and I*

Conclusion Toward a New History of American Theater

Chronology

Bibliography

## 論文の概要

「アメリカ」という単語こそ、全作品中一回だけ『間違いの喜劇』にしか登場しないものの、シェイクスピアが新大陸について何らかの知識を持ち意識していたことは、多くの研究者が指摘するところである。一方で、アメリカの側もごく早い内から「シェイクスピア」を強く意識していた。シェイクスピアは植民と共に大西洋を越えて、新大陸の文学・演劇伝統に移入されていく。

本論文は、このような視点に立ち、シェイクスピア作品に表れた概念のエッセンスを抽出し、それがアメリカの国家と文化が形成される段階で、いかに意識的かつ無意識的に搾取され変形していったか、その修辞的な変容を解明する。この意味において、本論文は、批評家アーデン&ヴァージニア・メイソン・ヴォーン Alden & Virginia Mason Vaughan に倣い、「シェイクスピア」が長年の様々な翻案改作、解釈、再構成、再利用を経験した結果、文化的表象であるとともに文化的記号 (cultural icon) と化したものと見なす。本文中の「アメリカ」もまた同様に、最も広い射程で使われる。それは植民当初から今日までの新世界、アメリカ植民地およびアメリカ合衆国という地理的な条件を指すと同時に、その地に住む人間と彼らが作り出した文化、制度、思想、精神をも含む。本論文は、こうした最も複合的な水準において「アメリカ」と「シェイクスピア」とがいかなる相互交渉 negotiation を経てきたか、その足取りを再検証する。

第1章 "Reception of Shakespeare in the New World" は、1840年代に起こった興行師 P. T. Barnum によるシェイクスピアの生家買い付け騒動とそれをパロディ化した Mark Twain の著作をモチーフに、アメリカにおける実際のシェイクスピア受容史を概観する。アメリカとシェイクスピアの関係の歴史は、17世紀初期植民地時代に始まった。18世紀には1730年にアマチュア劇団が『ロミオとジュリエット』を、その20年後にはプロ劇団が『リチャード三世』を上演した記録が残っている。独立・建国期にはシェイクスピア劇の台詞が反英運動にさえ援用され、やがて中産階級の台頭にとともに、シェイクスピアはパロディや替え歌が作られるほど庶民の娯楽として定着する。大衆文化の栄えた19世紀において、シェイクスピアはもっとも人気があり、もっとも上演回数が多い演目だった。19世紀に入ると、シェイクスピアに関する論述も格段にその数を増し、アメリカン・ルネッサンスの文人たち、たとえば Henry David Thoreau の "Advantages and Disadvantages of Foreign Influence on American Literature" (1836) や、Ralph Waldo Emerson の "Shakespeare, or the Poet" (1844)、Herman Melville による Nathaniel Hawthorne 作 *Mosses from an Old Manse* (1846) に対する書評 "Hawthorne and His Mosses" などを読むことがで

きる。とくにメルヴィルは、1848年頃にシェイクスピア全集を入手しており、以降シェイクスピア戯曲の反映としては彼の「*Moby-Dick*(1851)に*King Lear*の引喩を、*Pierre* (1952)に*Hamlet*の系譜を見いだせる。Walt Whitmanもまた、1880年代にシェイクスピアに関する論考をいくつか綴った。本章では、とりわけ経済的視点の導入によって、18世紀後半にアメリカ社会が生産主義から消費主義へと移行し、それに伴いシェイクスピアも中産階級向けの大量生産娯楽商品となり、その結果、アメリカ全土に広まり、シェイクスピアのアメリカ化が促進された経緯を重視する。

第2章"The Globe upon a Hill: *Theatrum Mundi* in Early American Puritan Sermons"では、17世紀ピューリタンの説教が行われた言説空間に、グローブ座と同じ世界劇場の構図を見いだす。新大陸は神の劇場であると説き人心をまとめることによって、ピューリタンの指導者たちは「丘の上の町」の建設を試みたのである。その背後には、確固たる宗教共同体を建設しなければならない初期植民地時代固有の政治的動機があった。17世紀ピューリタンの説教を演劇と捉えるならば、従来18世紀初頭に始まると考えられてきたアメリカ演劇の起源は一挙に百年さかのぼるだろう。

第3章"Signifyin(g) Othello: Frederick Douglass' *Narrative* and the Black Minstrel Show"は、『オセロ』が19世紀の黒人運動家 Frederick Douglass の『自伝』(1845)に見られるアメリカ的表現特有の文学装置を通じて受容されたという仮説の上に立つ。そして、ダグラスとミンストレル・ショーの黒人芸人さらに Eugene O'Neill の現代劇 *All God's Chillun Got Wings* (1924)とを並列させ、オセロ像が白人に迎合するようであるその裏をかくトリックスター「いたずらオセロ」へと変容を遂げたことを示す。

第4章"Juliet as a Public Woman: Domestic Ideology in the Writings of Anna Cora Mowatt"では、ジュリエットを父親と家父長制に反抗する娘の象徴として考え、その変容を19世紀アメリカの女優に見いだす。この章で明らかにするのは、1840年代の人気女優モワットが、『自伝』(1854)とジュリエットをモチーフにした感傷小説 *Stella* (1855)の執筆を通して、いかに女優としての自己と当時の家庭神話との折り合いをつけたかという点である。演劇制作活動が常に白人に独占されてきた結果、劇作品には非白人を抑圧する白人中心主義が刷り込まれている。

第5章"Prospero's Playbook: Cultural Colonialism from the Tom Show to *The King and I*"は、演劇制作という文化活動が常に白人の手に握られていた状況に着目する。プロスペロ的発想を Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin* (1952)を舞台化した大衆演劇トム・ショーから、その形式を取り込む今世紀のブロードウェイ・ミュージカル、Anna Leonowens の *The King and I* (1951)に

まで追う。アメリカはいわば被植民者キャリバンとして、宗主国イギリスの文化伝統シェイクスピアを取り込み独自の演劇伝統を作り上げたが、その作り出された演劇伝統には、植民者として黒人やアジア人を抑圧するプロスペロ的側面が反映されていた。アメリカはシェイクスピアを搾取するというポスト・コロニアルな活動を展開する一方で、他者を抑圧するコロニアリズムを絶えず生産する二重の存在なのである。

結論"Towards a New History of American Theater"では、シェイクスピアをアメリカの劇作家として読み替える本論文の主旨が、1990年代後半から始まったばかりの多元文化主義にもとづく新しいアメリカ演劇史構築に貢献する試みであることを示す。従来のアメリカ演劇史の大半は、今世紀初頭に近代劇の誕生をもたらした劇作家 Eugene O'Neill の記述をもって始まるのが常で、それ以前の演劇についてはあまり触れていない。それはひとえに、旧来の演劇史がひとつの二元論的かつ進化論的な歴史観に支配されてきたことによる。

すなわち、20世紀以前を職人芸のメロドラマ、それ以降を芸術的ナリアリズム演劇というふうに二分して、19世紀末から20世紀初頭にかけて、アメリカ演劇は前者から後者へと「進化した」と考えるのだ。しかし「上演 theater」よりも「戯曲テキスト drama」を高く評価する価値基準自体がロマン主義以降の産物に過ぎず、それより以前にすでにアメリカには豊かな大衆演劇の伝統があったのである。90年代後半に入り、*The Cambridge History of American Theatre* (1998)と*The History of North American Theatre* (1999)が刊行され、ようやく初期演劇文化に注目する新しい演劇史が編纂されつつある。近代劇成立以前に注目する本論文も、こうした近年の批評動向に連なるものである。

とはいえ、こうした新しいアメリカ演劇史においてすら、シェイクスピアは往々にして無視されてきた。90年代に入ってから初期演劇を対象とする研究は増えつつあるが、当時のシェイクスピアの圧倒的な人気はアメリカ独自の演劇の発展を妨げたものとして、否定的に捉えられる傾向にある。しかし、先に述べたように、アメリカがシェイクスピアを搾取していたのだとすれば、シェイクスピアをアメリカ演劇史に名を連ねられるべきアメリカの劇作家として読み直すことができる。そして、こうした新しいシェイクスピア像を通して、新しいアメリカ演劇史を書く余地が生まれるのではないかという主張こそ、本論文が最終的に提示する理論的展望にほかならない。

## 審査の要旨

以下、2000年11月1日(水)に行った口頭試問の質疑応答をもふまえて、審査委員会の所見を要約する。

常山論文の核心となっているウィリアム・シェイクスピアといえば、第一義的には、英国エリザベス朝を代表する詩人・劇作家として広く知られていよう。けれども論者は、そうしたシェイクスピアのなかに、とりわけ彼の『テンペスト』の中に、新世界アメリカに対する植民地主義的な視線が確実に見られる点に注目し、シェイクスピア本人の抱いていたアメリカへの意識とともに、彼を積極的に受け入れていったアメリカの大衆的無意識とのかかわりを、その修辭的側面に注目しつつ、きわめてダイナミックに描き出してみせる。

もちろん、常山君の独創性を厳密に測定するなら、従来、アメリカとシェイクスピアの関係を問い直す研究そのものは決して少ないとはいえず、その主題は今世紀初頭から多くの研究者の関心の的であったことを指摘しておかなくては、公正を欠く。ただしそれらの大半は、Charles Shuttuckの*Shakespeare on the American Stage* 2vols(1976, 87)に顕著に見られるように、アメリカにおけるシェイクスピア受容の経緯を追究する、あくまでも歴史主義的な研究の成果であった。ところが、1980年代以降になると、冷戦解消前後に勃興する新歴史主義批評やポスト・コロニアリズム批評、および広義における文化研究といった尖端的な批評理論の枠内において、たとえばLawrence W. Levineの手になる*Highbrow/Lowbrow* (1988)や、Harriett Hawkinsの論文“From ‘King Lear’ to ‘King Kong’ and Back”(1990)などのように、シェイクスピアが大衆文化として受け入れられていた歴史を紐解き、高尚芸術と大衆文化の区分を解体しようとする新しい方向が現れた。常山論文最大の特色は、伝統的な歴史主義的研究の成果はもちろんのこと、1980年代以降に顕在化したこれら理論的最先端の成果をもまんべんなく吸収しながら、伝統的なイギリス文学史の視点からだけでは決して見えてこないシェイクスピア像を、とりわけポスト・コロニアリズム批評に見る植民者と被植民者との複雑な関係の再評価という視座から浮き彫りにした点、その結果、民衆文化一般をも積極的に考慮に入れた上で、従来必ずしも強調されることのなかったアメリカ演劇史上におけるシェイクスピアの修辭的な意義を明らかにした点にひそむ。

この論脈の中で常山君は、シェイクスピア劇の言説が、マイノリティの周縁化と脱周縁化の両方の道具として機能してきたことを具体例に示し、アメリカ演劇史に新たな視点を導入しようとしている。その斬新なパースペクティヴは、とりわけ個別のテクストを対象としてその中におけるシェイクスピア的言説を

浮き彫りにした、第3 - 5章において十分に発揮されていると言えよう。

しかしその一方で、そうした個別研究が、シェイクスピアの受容と変容という全体の枠組の中に十分に定着しておらず、また同時に、枠組自体にも多少の論述不足が認められることも事実である。以下、各章毎にコメントする。

アメリカにおけるシェイクスピア劇上演史を中心に、シェイクスピアのアメリカにおける受容を辿った第1章は、歴史的流れを具体的かつ読みやすくまとめているが、シェイクスピアは同時代においてはあくまでその他の劇作家ベン・ジョンソンやトマス・イーストン、ジョン・ウェブスターらの内のひとりとして相対的な地位を占めていたにもかかわらず、本論文は最初から文学史的正典としてのシェイクスピアを無条件かつ絶対的に特権化してしまっているきらいが見られる。シェイクスピアをも一員とするその同時代劇作家たちの文壇的構図が明確にされていれば、この受容史の記述はいっそう説得力を持ち得たであろう。また、シェイクスピアの受容と変容の歴史はイギリスでも同時進行していたことを考えると、特に18-19世紀の演劇を論じるに際しては、同時代のアメリカのみならずイギリスをも常に射程において論じることで、よりダイナミックな受容史の構築が可能であったと思われる。また、冒頭でアメリカ人興行師バーナムがシェイクスピアの生家を買収しようとしたというエピソードは、読者の注意を一気に集めて放さない点では巧みな導入部となっているものの、それ以降の論脈において、このエピソードの孕む重大なる意義がつきつめられないのも、論文構成上の問題点であろう。

第2章においては、劇場を禁止した偶像破壊的なピューリタンの説教活動が、自分たちを神という観客に注視されている「世界劇場」における役者とみなす演劇的基盤を有し、また、説教者が使用するイメージやレトリックにおいては、忌避されたヴィジュアルかつドラマティックな要素が認められるという、逆説的構造の存在が指摘されている。その結論自体は納得のゆくものであるが、「世界劇場」というメタファーが中世の説教者にも使われており、説教文学のレトリックにおいてはカトリックからプロテスタントへの連続性が比較的強いことを考慮するならば、説教の演劇性を特にシェイクスピアの受容と変容との関わりにおいて論じる必然性が多少稀薄であるように感じられる。文学史的影響関係についても、もう少し強力な傍証が求められよう。

第3章では、Frederick Douglassの自伝中に登場する『オセロ』からの引用を出発点として、周縁化された存在としてのオセロとダグラスとの類似点に注目し、さらには常山君自身の演劇研究の出発点でもあったオニールの再評価をも導く文脈の中で、自己を周縁化しつつ白人社会で存続してゆく道を見いだすアメリカのオセロたちの存在を巧みに浮上させる、まことに壮大かつ挑戦的な議論が展開される。その姿勢は、本邦英文学界における学術雑誌の最高峰<英文

学研究>編集委員会でも大いに注目されることとなり、厳正なる審査を通過して、同誌第75巻第2号(1998年)に掲載されるに至った。ただし、『オセロ』自体の批評をさらに深め、特に、イギリス人の目に映った16世紀ヴェネチアの多文化的な表層と内実との差異を、アメリカの状況と比較していれば、この主題をいっそう深く掘り下げることができたのではあるまいか。

第4章では、家父長制から逸脱する存在としてのジュリエットをキーワードとして、Anna Cora Mowattの女優及び作家としての、アメリカ演劇史に密着したエピソードが緻密に論じられており、論文中でも最も説得力のある一章となっている。アメリカ演劇史がこれまであまりにも長くO'Neill以後の成果に拘泥し、19世紀以前の演劇テクストはまともな研究対象になることすら稀であった事態に鑑みると、少なくとも本邦ではまったく知られていないMowattの作品群を精力的に掘り起こし、日本人研究者としては初めて本格的に取り組んだ常山君の姿勢は、それだけでも特筆されてしかるべきであろう。いずれにしても、これら第3章と第4章に関しては、論者の批評的想像力が論文中最も雄大な展開を示しており、審査員一同、共通して高い評価を与えた。

第5章では、『テンペスト』におけるキャリバンとプロスペロの関係を、白人による教育と宣教の対象としての非白人という固定化された関係のプロトタイプとしてとらえ、その関係が今日に至るまで繰り返されてきたという図式が具体的に示されている。シェイクスピア劇は、あたかも『テンペスト』においてプロスペロとミランダがキャリバンに教えた言葉と同じく、宗主国イギリスが植民地アメリカにほどこした「文化の恩恵」であった。19世紀末以降には、『テンペスト』に新大陸の状況を当てはめ、プロスペロとキャリバンの関係にイギリス植民によるアメリカ先住民支配を重ねる解釈が広く認識されてきている。1960年代後半にLeo MarxおよびLeslie A. Fiedlerは、シェイクスピア本人の意図や意識を越えて、『テンペスト』を後世のアメリカ的な寓話の原型を示した予言的なテクストとする読みを展開した。さらに1980年代後半以降のポスト・コロニアリズム的解釈を経て、この作品はあらゆる植民地帝国主義的な権力関係を表象するテクストとして読み直され、旧植民地の作家たちによって改作を施される。さて、このような『テンペスト』をめぐる一連の批評の中で見落とされてきたのが、アメリカ合衆国の持つ被植民者としての「キャリバン」的性格であった、と常山君は断じ、その伝統がいかにかストウが黒人奴隷制を扱った『アンクル・トムの小屋』やレオノウェンズが東洋と西洋の確執を扱った『王様と私』へと、いわば多文化的に影を落としていったかを克明に分析する。アメリカは紛れもなくかつての植民地であり、アメリカ人はヨーロッパ系移住者の子孫という点でクレオールである。被植民者は植民者の文化を再搾取して、「ほとんど同じだが同じではない」"almost the same but not quite"ポス

ト・コロニアル文化を作り上げる。"English literature"を模倣した結果生まれた小文字の"english literature"は独自の英文学とならざるをえないのではないが、シェイクスピアもまた大文字で始まる Shakespeare から小文字で始まるグローバリズム時代の'shakespeare'へと再規定しうるのではないかと見る序論の理論的基盤を、本章ほどに雄弁に例証するものはない。常山君は、イギリスからアメリカに移入された段階でシェイクスピアがすでに異種混交的(hybrid)なアメリカ独自の演劇のかたちへと変貌を遂げる運命にあったことを鋭敏に意識している。ただしキャリバンが植民地化のプロトタイプとして機能してきたという前提に関してはいささか十分に立証されていないうらみがあり、第3, 4章と比較して、シェイクスピアとの関係への絞り込みをよりいっそう深く図る必要がある。また、この点は、論者が序論で、アメリカへの移入を経たシェイクスピアに鑑み、"Shakespeare is no longer a purely British article" (5)と主張していることともからむが、それならそもそも"a purely British article"とは何であったかという問いかけにあらかじめ答える用意をしておくことも肝要だ。そのためには、シェイクスピアを文化的記号と見なす本論全体の前提を、もう少し詳細に理論化しておくべきである。

以上のように、常山論文では、シェイクスピア劇の主役たちがいかに黒人、女性、東洋人というマイノリティの意識を覚醒させ、彼らが支配的文化のなかでの自分の位置を再把握しつつも、あらためて周縁化されざるをえないいきさつが、具体的に示されている。それはアメリカ演劇がシェイクスピアによって自己形成していった歴史とも考えられるが、第3 - 5章における具体的研究では、対象となるテキストとシェイクスピアとの関わり方はそれぞれに異なっている。そこには、まさに筆者が指摘するように'extensive relationship between America and Shakespeare' (8)が存在しているが、その関係の多様性をめぐる批評的準拠枠がより明確に示されていれば、論文全体の概念的構造がより堅牢なものとなったであろう。論者は単なる受容史ではなく、'figurative reception'と'rhetorical transfiguration' (11)を対象とするというが、そうした前提に関してより丁寧な説明が望まれる。

Bibliographyにおいては、primary source と secondary source を分けて列挙するとともに、本文中に挿入されている illustration については、その出典と著作権を明示する意味で list of illustration を作成することが必要である。

しかし全体として見る限り、常山論文は、具体的な一次、二次資料に裏打ちされた、論理的破綻のない、きわめて明快にして読みやすい英文で執筆されており、その独創的かつ学問的貢献度の高いアプローチと、いくつかの章において展開される思索力あふれる推論故に、文学博士号を授与されるに相応しい論文と判断する。